

国語国文学科第五十四回生 卒業論文題目

— 令和四年卒業 —

近世における茶の湯

— 井原西鶴の『浮世草子』を中心に —

動物と文学

— 「奇妙な仕事」から考える、動物愛護について —

夏目漱石『明暗』論 — 「生きづらさ」の正体とは —

前川知大論 — 戯曲『太陽』を中心に —

「武士語」はどのようにして記号化されたのか

耽美派の作家に共通する美しさとは

太宰治『人間失格』論 — 作者の人生観について —

谷崎潤一郎『痴人の愛』論 — 本当の愛とは何か —

樋口一葉作品から見る明治期の女性の生き方

若者から見た「バイト敬語」

「鬼」の研究

谷崎潤一郎の理想の女性像

夕顔論

怨霊と祟り

夏目漱石『吾輩は猫である』論

江戸川乱歩『吸血鬼』論

芥川龍之介『羅生門』論 門の役割について

日本人の誤用日本語

SNSチャットの「笑い」表現について

『源氏物語』紫の上の人物造形について

— 若菜上巻より —

日本語原作漫画の英語翻訳における役割語について 田中美衣奈

中原中也『山羊の歌』論 深田 紗香

コンセプトカフェの世界観と用語 菊池 愛宥

オノマトペの日英比較 村山 璃華

— 『ルウエイの森』を対象として —

対面と非対面場面での相槌

— 非対面場面での会話をスムーズにするために —

「大丈夫」の変遷について 室園 彩歌

江戸川乱歩『人間椅子』論 野口 祐佳

森鷗外『舞姫』論 志賀 美月

『源氏物語』の物の怪 — 六条御息所を中心に — 川上 佑依

与謝野晶子と現代の「女子力」 根本 玲奈

— 時代とともに変化する女性観 —

『源氏物語』と源氏能 奥山あかり

茶道と和歌 佐藤 香菜

『落窪物語』の和歌について 関 遥香

『遠野物語』研究 丸尾 菜月

『源氏物語』末摘花について 大久保暢音

樋口一葉の作品にみる明治時代の格差社会 川上 奈々

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論 齋藤 彩奈

鳥山石燕『画図百鬼夜行』に描かれた妖怪たち 榎田朱未澪

安田紫遠里

笹原 歩実
苦米地未来

大田 安鶴

深田 紗香
菊池 愛宥

村山 璃華

室園 彩歌

野口 祐佳

志賀 美月

川上 佑依

根本 玲奈

奥山あかり

佐藤 香菜

関 遥香

丸尾 菜月

大久保暢音

川上 奈々

齋藤 彩奈

榎田朱未澪

安田紫遠里

東京若年層方言の文末形式ジヤネについて

『源氏物語』玉鬘と光源氏——初音巻から真木柱巻まで——

『地獄変』研究——美と醜について——

小野小町研究

若者言葉の定着について

方言「えらい」について

宮沢賢治の童話作品から考えるオノマトペ

『マルスの歌』論——帯子に見る曖昧さ——

『銀河鉄道の夜』を考える

『恐怖』の文学

小野小町と遊女

明治期の文学における女性の教育と現実

太宰治「女性独白体小説」研究

——『女生徒』から『ヴィヨンの妻』への道——

『古今和歌集』鞍旅歌について

島尾敏雄『島の果て』論

佐多稲子『キャラメル工場から』論

『異界』を読む

依頼表現について——文末表現に焦点をあてて——

『すみません』について

公立小・中学校の校歌における言語的特徴

——埼玉県深谷市を対象に——

樋口一葉作品に描かれた女性の生き方

『落窪物語』に登場する女房あこきの活躍について

『落窪物語』論 灰かぶりとの比較を通して

佐藤夏穂果

村尾 晴美

堀越 有沙

長谷 優香

香取友葵夏

金澤 梨央

浦道 涼香

徳田 夏奈

藤善みちる

九鬼さやか

中島 朱理

杉山 叶

町田佑里香

大谷 美鈴

塩谷 泉空

瀬下 萌

秋山 裕香

米田 彩乃

加畑 千鈴

中田 絢野

中村 春菜

石垣 美奈

中川 真綾

石川淳『処女懐胎』論

宮城県方言「いきなり」について

口頭でのコミュニケーションにおける間

——落語の分析を通して——

『源氏物語』における夕顔について

泉鏡花初期作品における此岸とは

——義血侠血『夜行巡査』『外科室』を中心に——

樋口一葉作品にみる女性像

近代文学作品から見られるフェミニズム思想

——与謝野晶子と平塚らいてうを中心に——

『古今著聞集』における怪異・変化の研究

Pokémonの名前から考えるオノマトペ

——でんきタイプの音象徴——

作中人物の人間性と時代背景の関連性

近代と現代の女性の立場の違いについて

——なぜ女性差別という言葉が消えないのか——

新語・流行語の発生理由と、地域別使用状況について

清水佑莉奈

石田みのり

岡田 彩月

菅原 樹里

松波 京花

畠山 莉夢

海部菜美子

森田彩依有

塩谷 理子

島田 望

内山 葵

石井亜柚香